

誘惑する葡萄： *The Faerie Queene* 第2巻の語りと悦び

水野眞理

1

Edmund Spenser の *The Faerie Queene* (1590-96)¹⁾ の完成している6つの巻に主題として割り当てられた徳目—神聖 (Holiness), 節制 (Temperance), 貞節 (Chastity), 友情 (Friendship), 正義 (Justice), 礼節 (Courtesy)—を見渡すとき, 第2巻の徳目である節制は, 他の5つの徳目がはらむような, 豊かな, ときには神話的な連想の広がりをもたない, いかにも面白みのない徳目のように思われる。節制—欲望と感情を抑えること, 中庸を心がけること—は最も物語 (ロマンス) になりにくい美德であろう。欲望と感情, 過剰こそは物語の手触りを生き生きとしたものにする要素であるから。どこかけちくさい匂いのする節制の徳を体現する寓意の人物が物語の魅力的な登場人物になりうるとはおよそ考えられない。しかし Spenser はそれを「アリストテレスのあげた12の私徳」の一つとして取り上げるという, 物語の書き手としては無謀な試みをおこなっている。

道徳的な結論は最初から出ているのだ。要するに, 節制が不節制に打ち勝つ, ということである。それは読み手にしてみれば, あまり楽しそうな話とは思えない。しかし, Spenser はもっと物語として楽しい読み方を用意してくれている。本稿ではまず, 読み手としての反応を記述していくことによって, 読者を

楽しませる詩人の技を検討したい。さらに、文学の教訓的な側面と読み手の快樂について、当時のコンヴェンションを見てみたい。我々は教訓詩の書き手と読み手の関係について一つの問題の所在に気づくことになる。

2

FQ 第2巻の後半、Canto 10において、遍歴の騎士 Guyon と王になる前の Arthur が Alma の館で各々の祖国の歴史を記した書物を読むくだりがある。Arthur が読む *Briton moniments* (『ブリトン年代記』)、すなわち、「Brute より Uther に至るブリトンの諸王の年代記」の内容は、梗概の形にしても64スタンザ、569行を費やして語られるが、その結末の部分は次のようになっている。

After him *Vther*, which *Pendragon* hight,
 Succeeding There abruptly it did end,
 Without full point, or other *Cesure* right,
 As if the rest some wicked hand did rend,
 Or th'Authour selfe could not at least attend
 To finish it: that so vntimely breach
 The Prince him selfe halfe seemeth to offend,
 Yet secret pleasure did offence empeach,
 And wonder of antiquitie long stopt his speach.

彼 (Aurelius) の後、*Pendragon* と呼ばれる Uther が
 引き継ぎ　そこで年代記は突然終わっていて、
 ピリオドも打たれず、それ以外の正しい終り方もしていなかった、
 誰かが悪意で残りの部分を引きちぎったか、
 作者自身が最後のところでそれを
 書き終えられなかったかのように。こういう場違いな中断に
 王子はなにかば腹立たしく思ったようだが、
 密かな悦びが怒りをしずめ、
 昔のことどもへの驚きで長い間口も聞けなかった。

Uther Pendragon が Arthur の父親であることを Arthur は知らされていないことになっている。³⁾ 従って、Uther のところで年代記が途切れているのは物語の都合上必要なことではある。しかし、そこでの Arthur の反応が、物語への悦びと中断への怒りであることは注目しておかなければならない。一方、Guyon は *Antiquitie of Faerie lond* (『妖精の国の古史』)、すなわち、「Gloriana に至る妖精の帝王たちの巻物」を読むが、余りに大部なその書物の内容は詳しくは語られない。それは少なくとも Arthur が『年代記』を読み終っても Guyon が読み終らないくらいの長さのものである。こうして二人はそれらの書物を読み耽り、時間を忘れる。

Beguild thus with delight of nouelties,
 And naturall desire of countreys state,
 So long they red in those antiquities,
 That how the time was fled, they quite forgate,
 Till gentle *Alma* seeing it so late,
 Perforce their studies broke, and them besought
 To thinke, how supper did them long awaite.
 So halfe vnwilling from their bookes them brought,
 And fairely feasted, as so noble knights she ought.

珍しいことどもを読む悦びと、
 自国の事情を知りたいという自然な欲望につられて、
 彼らはそれらの古えの記録を長い間読んでいたので、
 時の経つのもすっかり忘れていた。
 余りに遅くなったので遂に貴婦人 *Alma* が
 無理やり読書をやめさせ、夕食の用意が
 とっくにできていることを知らせた。
 そしてなかばいやがる彼らを本から引き離し、
 このような高貴な騎士にふさわしい立派な食事でもてなしたのである。

このエピソードは *FQ* 第2巻における読み手に対する仕掛けを象徴的に示すものとして興味深い。書物が読むことへの欲望を喚起し、悦びを与え、そして、それが中断され、遅延されるのだ。それは物語一般の常套かもしれない。しかし、*FQ* 第2巻が節制という徳目を扱うがゆえに、この欲望の中断、遅延はいっそう意義深い。

3

FQ の6つの巻を通じて Spenser が用いる手法は、各巻の主題をなす徳目の反対の概念を体現する場所や寓意的人物を登場させる、というものである。第1巻では、神聖を具現する赤十字の騎士に対して、魔術師 Archimago とバビロンの淫婦を思わせる悪女 Duessa を配し、第6巻では礼節の騎士 Calidore に対して Blatant Beast を配する、という具合である。第2巻でも騎士たちを節制から引き離し、放縦へと誘惑する力はいたるところに働いている。この巻は「節制の物語」ではなく、「誘惑の物語」と名付けた方が似つかわしいほどだ。Spenser がこの巻を書いた意図はもちろんポルノグラフィックなものではないが、この巻とポルノグラフィに共通点がないわけではない。まず、時として挿入される節制とは正反対のきわどい場面は、ポルノグラフィのそのような場面と同様、形の上では登場人物の欲望への働きかけを描きながら、同時に読み手の欲望に働きかけている。さらに、登場人物の内に、また読み手の内に生み出される欲望は中断されるか、遅延されるかして、容易には成就されない。詩人はしばしば読み手の期待に答え、裏切り、またはぐらかしつつ、物語を進めていく。そして読み手はそのような語りに翻弄されることに快い刺激を覚えるのだ。

例えば、中心人物 Guyon が倒さねばならない魔女 Acrasia の棲む Bower of Bliss (至福のあずまや。以後 Bower と略記する) の場面を見てみよう。物語の3分の1を過ぎたあたりで、交互する欲望と怒りの寓意的人物である異教徒

Cymochles がこの Bower に泊り込んでいるのを Cymochles の従者 Atin が発見する。Cymochles は、ルネッサンスの画家たちが好んで描いた主題「ヴィーナスとマルス」の絵画のマルスさながら、武器を放り出して寝そべり、薫でできた四阿、馥郁たる薔薇、穏やかな風、歌うように流れる小川、堂々たる大木の森、小鳥たちの合唱、といったいかにもコンヴェンション通りの *locus amoenus* (心地よい場所) の中で、しどけない美女たちのもてなしを受けている。この光景は極めてエロティックに、しかも念入りに描かれる。

There he him found all carelesly displayd,
 In secret shadow from the sunny ray,
 On a sweet bed of lillies softly layd,
 Amidst a flocke of Damzels fresh and gay,
 That round about him dissolute did play
 Their wanton follies, and light meriment;
 Euery of which did loosely disaray
 Her vpper parts of meet habiliments,
 And shewd them naked, dect with many ornaments.

And euery of them stroue, with most delights,
 Him to agrate, and greatest pleasures shew;
 Some framd faire lookes, glancing like euening lights,
 Others sweet words, dropping like honny dew,
 Some bathed kisses, and did soft embrew
 The sugred licour through his melting lips:
 One boastes her beautie, and does yeeld to vew
 Her daintie limbes aboute her tender hips;
 Another her out boastes, and all for tryall strips.

Atin は Cymochles がすっかり気を許して寝そべっているのを見た。
 日差しを避けた秘めやかな木陰で、
 柔らかく敷き詰められた百合の心地よいしとねの上で、
 若くて陽気な乙女たちの群に囲まれて。

乙女たちは彼を囲んで自墮落に
 淫らなおふざけや、軽い余興で戯れていた。
 どの乙女もしどけなく
 上半身からふさわしい着物を脱ぎ、
 様々の飾り物で飾った裸体を見せていた。

そして誰もが最大の喜びで彼を悦ばせ、
 最大の楽しみを見せようと競っていた。
 夕刻の光りのようにちらつく流し目を送って愛想を作るものもあれば、
 蜜のように滴る甘い言葉をささやくものもあり、
 キスの雨を降らせて、彼のとろける唇に
 甘い分泌液をそっと注ぎ込むものもいた。
 一人が美貌を誇って柔らかい腰より上の
 優美な肢体をあらわにすると
 もう一人も負けてはいず、さあ見比べてとばかりに、全身をあらわにするのだ。

(II. v. 32-33)

この場面は Cymochles に対する当時の brothel を思わせるさまざまの歓待ぶりを描きながら、詩人 Spenser が読み手に対してもかなりきわどい楽しみを差し出しているように思われる。

しかし、Cymochles 自身は、まだ何もしていない、ということに注意を払う必要があるだろう。そして、これに続くスタンザで、従者から兄の死の知らせを受けた Cymochles は、即座に夢心地から醒め、武具を纏ってあっけなく出立してしまう。ヴィーナスとマルスの図像を重ね合わせてこの箇所を読んだ読み手は、Cymochles が欲望の遂行のために逗留を続け、兄の死にたいする復讐を先延ばしにするだろう、あるいは、少なくとも不満を洩らしながら Bower をあとにするだろう、と予想する。その予想は裏切られ、読み手の期待するさらなる楽しみは中断される。

節制の騎士であるはずの Guyon も、ただ一度誘惑に心を動かされるが、それはこの Bower に付属する園において、それじたいエロティックな噴水の池で

二人の美女が裸で戯れあっており、通行者にこれみよがしにその姿態を差し出すときである。

And ouer all, of purest gold was spread,
 A trayle of yuie in his natiue hew:
 . . .
 Low his lasciuious armes adown did creepe,
 That themselues dipping in the siluer dew,
 Their fleecy flowres they tenderly did steepe,
 Which drops of Christall seemd for wantones to weepe.

噴水をおおのように、純金でできた
 天然の色の蔦の蔓が絡まっていた。

. . .
 蔦の欲情する腕は「噴水を」這いおりて
 銀のしづくに触れ、
 その柔毛のような花をそっと水に浸していて、
 淫らさから、澄んだ水滴の涙を流しているように思えた。

(II. xii. 61)

Whom such when *Guyon* saw, he drew him neare,
 And somewhat gan relent his earnest pace,
 His stubborne brest gan secret pleasaunce to embrace.

Guyon もそのような二人を見て、そちらへ近づき、
 その真面目な歩みをいささか緩めた。
 彼の剛毅な胸がひそかな楽しみを抱きはじめてのだ。

(II. xii. 65)

しかし、これによって *Guyon* は同行の巡礼から直ちにたしなめを受け、素直に旅を続けるため、このエピソードがそれ以上発展することはない。読み手はここでも楽しみを中斷される。*Guyon* に関して言えば、彼が誘惑に対していさ

さかでも人間的な反応を見せるのは第2巻全体の中でこの一箇所であり、これを除いて Guyon は誘惑にまったく無反応である。節制の寓意的人物 Guyon には葛藤のドラマはほとんどない。

読み手に楽しみを差し出し、そして、それを中断することによってさらに読み手の欲望を持続させる語りの手法は、第2巻全体の枠組をもなしている。第2巻の主題を担う中心的冒険は、騎士 Guyon による Acrasia とその Bower の征伐であり、そのことは Canto i で宣言される。にもかかわらず、この二人の遭遇は最終の Canto xii まで遅延される。最初に引用した Canto v の Bower の場面には Guyon も、また園の主 Acrasia も登場していない。Guyon は続く Canto vi においてようやく、Bower への渡し場に到るが、そこから舟を出してくれた乙女の仕業で、頼みもしない浮き島へ連れていかれ、焦燥感を募らせる。そして読み手もまた、Guyon がなかなか目的地へ着けないことに苛立ちを覚える。彼が Bower に到り、Acrasia と対面するまでに読み手はさらに6つの Canto, 3,000 行以上を読み進まねばならない。したがって、比較的早い Canto v で Bower が描かれるのは、Guyon と Acrasia との最終的な対決の場で待っているはずの轟感的なパッセージに向けて、読み手の内に期待を生み出す効果を持つ。

途中さまざまな寄り道を余儀なくされた Guyon と巡礼は、最終の Canto xii でようやく Bower に到着する。とはいうものの、この Canto を構成する 87 のスタンザのうち、最初の 69 スタンザは Bower を取り巻く風景の中を二人が Bower に向かって進んでいる過程を描いている。Stanza 42 で Guyon と巡礼は柵と門で外界から遮断された場所に到る。柵の外には猛獣がたけり狂っているのに対し、柵の内側はこの世の最高の職人の技で装飾されており、その門には Genius と称する怪しげな男が番をしている、という記述から、読み手はここからが Bower だと錯覚させられる。しかし二人がさらに進んで行くと、また門があって、そこまでは Bower ではなかったことがわかる。その門の先には中央に泉を持つ “the most daintie Paradise on ground” (地上で最も贅沢な楽

園 II. xii. 58) がある。この場所もまた、極めて念入りにその美しさ、装飾性が語られるにもかかわらず、Bower の外の一地点にすぎない。こうして第70スタンザになってやっと読み手は二人の登場人物とともに Bower にたどりつく。この果てしないクライマックスの遅延こそは、読み手をじらしつつ先へ先へと導く語りの手管である。

Canto xii で重要なことは、Bower 自体よりもそこへのアプローチにおいて読み手がどこか快楽的で殆どエロティックとさえいえる悦びを味わうということである。それは、Bower への途中にある門の一つに絡みつく植物が語られるパッセージにおいて頂点に達する。

No gate, but like one, being goodly dight
With boughes and braunches, which did broad dilate
Their **clasping armes**, in **wanton** wreathings intricate.

So fashioned a Porch with rare diuice,
Archt ouer head with an **embracing** vine,
Whose bounches hanging downe, seemed to **entice**
All passers by, to tast their lushious wine,
And did **themselues into their hands incline**,
As **freely offering** to be gathered:
Some deepe empurpled as the *Hyacint*,
Some as the Rubine, **laughing** sweetly red,
Some like faire Emeraudes, not yet well ripened.

And them amongst, some were of burnisht gold,
So made by art, to beautifie the rest,
Which did themselues emongst the leaues enfold,
As **lurking** from the vew of couetous guest,
That the weake bowes, with so rich load opprest,
Did **bow** adowne, as ouer-burdened.

(ボールド体は筆者)

それは門ではなく、門のようなもので、

大枝、小枝で美しく作られていた。枝々は、
絡まりあう腕を広げて、奔放な込み入った輪を作っていた。

そのようにポーチが珍しい趣向で作られ、
頭上には、絡みつく葡萄の蔓がアーチをなし、
その房は垂れ下がって、全ての通行人に、
甘美なワインを味わうようにと、誘惑するよう見えた。
そして、摘まれたい、と気前よく言わんばかりに、
自ら通行人の手の中へしなだれかかってきた。
ヒヤシンス石のように濃い紫に熟れたものもあれば、
ルビーのように、笑いかけるように甘そうな赤色をしたものもあり、
また、まだよく熟れていず、美しいエメラルドのようなものもあった。

中には、天然のものを飾るために人工的に作った
磨きあげた黄金細工のものもあり、
物欲しげな客の目から隠れるかのように
葉の間に身を潜めていた。
そのようなずっしりとした実の重みで、弱い枝々は
耐えかねたように頭を垂れるのだった。

(II. xii. 53-55)

原文中いくつかの語をボールド体にしたのは、門を構成する植物の描写に見られる過剰なまでの擬人化に注意を喚起するためである。Stanza 53で枝々の作る輪を形容する「奔放な (wanton)」は Spenser の好んで用いる語の一つであるが、その直前に置かれた「絡まりあう腕 (claspings armes)」と合わせて読むとき、この場所の植物は人間のごとき衝動をもって通行者に迫ってくる。そして Stanza 54では、そのような場所にまさにもふさわしく、葡萄が人を誘惑する。葡萄の「しぐさ」は、自発的に (sponte sua) 人に自らを差し出す、という古典的な *locus amoenus* の植物のしぐさの上に⁴⁾、男性を誘惑する女性のしぐさを重ね合わせたものである。第6行の「摘まれ (たい) (gathered)」にしても、擬人化という修辞を念頭においてみれば、かなりきわどい表現とも読め

る。続く3行は、葡萄の熟れ具合を宝石にたとえて語りながら、成熟の度合のさまざまな女性を思わせる表現になっている。そして、その下にはしどけない姿の女性が、熟れてはちきれそうになった葡萄の実をとっては、その汁を絞っている。

Vnder that Porch a comely dame did rest,
Clad in faire weedes, but fowle disordered,
And garments loose, that seemd vnmeet for womanhed.

In her left hand a Cup of gold she held,
And with her right the riper fruit did reach,
Whose sappy liquor, that with fulnesse sweld,
Into her cup she scruzd, with daintie breach
Of her fine fingers, without fowle empeach,
That so faire wine-*presse* made the wine more sweet:

この門の下に、一人のきれいな女性が休んでいた。
美しい衣装を身にまもってはいたが、それがひどく乱れていて、
女の身だしなみにはふさわしからぬ、ゆるい着物であった。

彼女は左手に黄金の杯を持ち、
右手で良く熟れた葡萄をとっては、
はちきれんばかりになったその甘い果汁を
絞っては杯に受けていた。ほっそりしたその指で
葡萄を潰さないようにそと絞るのだが、
こんなに美しい絞り手にあって葡萄酒は一層甘くなるのだった。

(II, xii, 55-56)

ここに張りめぐらされている連想の糸は、葡萄—葡萄酒—バックス—放縦と
いった観念を結んでいる。しかし、上記の引用での葡萄のしぐさが、そのよう
な観念上の操作を待つまでもなく、感覚的な—とりわけ触覚・嗅覚的な—誘惑

の効果を持つことは、強調してもよいだろう。葡萄が人を誘惑するという、一見グロテスク、あるいは荒唐無稽とも思えることが起こり得るのは、ここでも誘惑されているのが作品の中の通行者ばかりでなく、読み手自身でもあるからである。葡萄の房が「通行人の手の中へしなだれかかって」くるとき、それは読み手の手の皮膚にも触れている。続く「濃い紫に熟れた」「甘そうな赤色」といった語句を含む詩行を読む間に、読み手は想像の中で掌中の房から粒をもぎ、その舌は果汁を味わい、その鼻腔は香りをかいでしまう。登場人物の Guyon がこの門に対して何の興味も示さず、女性の差し出す杯も地面に叩きつけて前進していくのとは対照的に、読み手は誘惑に屈するのである。

Guyon と Bower の主 Acrasia との出会いは、そこに蠱惑的な場面を予想してきた読み手を裏切って、前者が後者を網で捕らえるという、無粋で、ほとんど滑稽な一瞬の事件でしかない。Acrasia が他の男たちに仕掛けてきた手管は Guyon には試されさえしない。Acrasia の捕縛はわずか1スタンザ、9行で語られてしまう。さらに Guyon が Bower を破壊するくだりも、1スタンザで片付けられる。そのやりかたは、ここまでの長旅につき合ってきた読み手にとっては余りにあっけなく感じられる。そのあっけなさは書き手が Guyon の自己抑制のドラマを書こうとしていないことを示している。書き手 Spenser にとって重要なのは、旅のプロセス、そこで現れるさまざまな場所の魅力が読者に対して持つ効果なのである。その意味では、読み手こそが遍歴の旅をする旅人なのだといえるかもしれない。このことは後にもう一度ふれることになる。

4

前章では *FQ* 第2巻の語りに含まれる享乐的な要素を余りに強調しすぎている、と見えるかも知れない。たしかに、少なくとも Spenser が良識的に公言するところによれば、「紳士、あるいは高貴の人を道徳的かつ身分にふさわしい教育で成型する (fashion)」⁵⁾ ことが *FQ* 全体の目的であり、*FQ* 第2巻がいかに

悦楽に満ちた世界であろうとも、その読み手は節制の徳へと成型されることになっている。

物語の持つ快楽と道徳的な要請の絡み合いは、しかし、Spenser 個人とか *FQ* という作品単独のものというよりは、人文主義の空気が濃厚であったエリザベス朝の文学的コンヴェンションとして捉えるべきであろう。それはしばしば、詩が楽しませるばかりでなく、あるいは、楽しませることによって、読み手を美德へと教え導くものである、という公式の形で論じられる。この考え方のルーツは Horatius の書簡体で書かれた『詩論』に見ることができる。

aut prodesse volunt aut delectare poetae
aut simul et iucunda et idonea dicere vitae

.....

omne tulit punctum qui miscuit utile dulci
lectorem delectando pariterque monendo

詩人は益を生むか、悦ばせるか、あるいは
人生にとって楽しく、同時にためになることをうたおうとする。

.....

有益なものと甘美なものとを混ぜ合わせた人が、
読み手を教えると同時に悦ばせることによって
万票を勝ち得たのだ。⁶⁾

悦ばせる、の意味の動詞 *delectare* (*delectando*) は、語源上本来からは外れた方向へ人を誘惑する、という含みがあり、*dulci* (甘美なもの) と合わせて、読書の喜びを、感覚的、官能的な経験の比喩で語っている。また、書き手の立場から言えば、読み手を喜ばせようとする創作の意図が、異性を魅惑しようとするエロティックな衝動に譬えられているとも言えるかも知れない。

このような理解のしかたが恣意的に見えるならば、詩論が盛んに書かれたルネッサンス期の英国に目を移してみよう。そこでもよく似た比喩の用い方に

我々は出会う。例えば、1583年頃書かれ、1595年に出版された Philip Sidney の *Defence of Poesie* の中でも上記の Horatius の文章とほとんど同じ主張が何度も繰り返されている。その中の一箇所を挙げてみよう。

... Poetrie ever sets vertue so out in her best cullours, ... that one must needs be enamoured of her.

詩はいつも美德に最高の装いをさせるので、... 読み手はどうしてもその美德に惚れてしまうのだ。⁷⁾

ここでは美德を女性に、読み手を男性に、そして詩を *pander* になぞらえている。誘惑の主体は、Horatius の場合は詩人であり、この Sidney の場合は詩とそれが訴える美德の共犯である、という違いはあるにせよ、誘惑されるものが読み手であるという点は共通している。Horatius が「甘美なもの (*dulci*)」、Sidney が「最高の装い (*best colours*)」と呼んでいるのは、読書の快楽と考えてよいだろう。読み手をとらえるその甘美な畏を詩の重要な一面としている点は注目に値する。

同じ Sidney の文章からもう一つ、詩の誘惑に言及している箇所を見てみたい。

... he [Poet] doth not only shew the way, but giveth so sweete a prospect into the way, as will entice anie man to enter into it: Nay he doth as if your journey should lye through a faire vineyard, at the verie first, give you a cluster of grapes, that full of that taste, you may long to passe further.

詩人はただ道を示すだけでなく、その道の甘美な眺めを見せるので、誰もがその道へと誘惑されるのだ。そればかりか詩人は、旅路が美しい葡萄畑を通っていると言わんばかりに、最初に一房の葡萄をくれるので、その美味で満たされて、読み手はもっと先へ進みたいと願うようになるのだ。⁸⁾

ここで用いられているメタファーはこれまで見てきたようなエロティックな誘惑というよりは、locus amoenus（心地よい場所）のそれである。*FQ* 第2巻について見たように、読み手は旅をする人に譬えられている。旅人は‘sweet a prospect’（甘美な眺め）に魅せられて、また葡萄の甘さにたぶらかされて、その道へと歩みを進める。ここで我々は*FQ* 第2巻の Bower への途中にあった、通行者を誘惑するエロティックな葡萄を想起せずにはいられない。そこでは登場人物 Guyon は誘惑に応じず、読み手だけが想像の中で存分に誘惑されたのであった。Sidney と Spenser が互いの文章を知っていたかどうかは不明であるが、二人の立場は近い。Sidney のいう道 (the way) とはもちろん美徳の道であって、*FQ* 第2巻のように悪徳の場所 Bowerに通じているわけではない。しかし、Sidney のメタファーは魔法の土地を遍歴する騎士が、悪の待ち受ける畏にはまってしまう、というようなイメージを伴うがゆえに、詩人の演ずる道案内の役割が、何やら妖術めいた色合いさえ帯びてくる。一方、読み手が演ずる旅人の役割も、大真面目に道徳を拝聴するというよりは、誘惑されたぶらかされる快樂に身を委ねることに類比され得るものになってくるのだ。

「楽しませつつ教える」という詩の機能が古典の時代から繰り返し主張されてきたことは、逆に、詩に対する否定的な主張の存在の証でもある。Plato による共和国からの詩人の追放以来⁹⁾、エリザベス朝において Sidney の *Defence of Poesie* はじめ多くの詩の擁護論を挑発した Stephen Gosson の *The School of Abuse* (1579) にいたるまで、詩（演劇をもふくめた虚構作品）の有害性に関する議論が根強く繰り返されてきたのである。そういう議論に対して、詩の道徳的な責任を一応認めた上で、詩が読み手を楽しませることを肯定しようというのが、「楽しませつつ教える」主張の主眼であったろう。そのように考えると、*FQ* 第2巻が節制と言う徳目を掲げながらも、その逆の方向へ大きく傾いた世界を描き、しかも、そちらへ読み手を誘惑することによって、物語としての楽しみを維持していることが、納得されるのである。

だから、*FQ* 第2巻がピューリタン John Milton の大のお気に入りであった

とは、皮肉というほかはない。彼は、出版の自由を訴え検閲に反対するパンフレット *Areopagitica* (1644) において Spenser を「賢明で謹厳な詩人」「Scotus や Aquinas よりも優れた教師」と呼んでいる。そして、善悪両方を経験した上での人間の選択に意味がある、として、*FQ* 第2巻「節制の物語」の中心的人物 Guyon の冒険を挙げている。

Which was the reason why our sage and serious Poet *Spencer*, whom I dare be known to think a better teacher then *Scotus* or *Aquinas*, describing true temperance under the person of *Guion*, brings him in with his palmer through the cave of Mammon, and the bowr of earthly blisse that he might see and know, and yet abstain. Since therefore the knowledge and surway of vice is in this world so necessary to the constituting of human vertue, and the scanning of error to the confirmation of truth, how can we more safely, and with lesse danger scout into the regions of sin and falsity then by reading all manner of tractats and hearing all manner of reason? And this is the benefit which may be had of books promiscuously read.

われらが賢明で謹厳なる詩人 Spenser, 敢えていうが Scotus や Aquinas よりすぐれた教師だと私には思われる Spenser が Guyon という人物を借りて真の節制を描くときに, Guyon が「見て知り, しかも差し控える」ことができるように, 巡礼とともにマモンの洞窟や地上の快樂の園を訪れるようにしたのも, 同じ理由によるのである。従って, この世で悪徳を知り, よく調べることが, 人間の美德を形成するのに必要であり, 誤りを見定めることが真実を確認するのに必要であるとすれば, あらゆる種類の論文を読んだり, あらゆる議論を聞いたりすることほど, 安全に, 危険を侵さず罪と誤りの領域を偵察する方法があるだろうか。手当たりしだいに本を読むことから得られるだろう利点はこれなのである。¹⁰⁾

Milton が Spenser の作品に言及し, しかも思い違いをおかす, という事情のせいで, このくだりは *Areopagitica* の中で最も有名な箇所の一つになっている。¹¹⁾ しかし, 上に見たように *FQ* 第2巻はむしろ読み手への誘惑を主たる魅

力とする物語であり、Miltonが言うような意味でSpenserが「賢明で謹厳な詩人」, 「すぐれた教師」¹²⁾ であるかどうかについては、大いに議論の余地があるように思われる。またMiltonは遍歴の騎士Guyonを書物の読み手のアーキタイプと見ているが、それならば、*FQ* 第2巻そのものの読み手も「見て知り、しかも差し控える」ためにこの作品を読まねばならないのだろうか？ それはロマンスの楽しみ方ではない。

上に引用したMiltonの言葉の中に、「楽ませる」という言葉は一度もでてこない。結局Miltonは、詩の効用を「教える」ことに限定することによって、皮肉にも出版の自由を訴える文章の中で、ふたたび「共和国」からロマンスの詩人と読者を追放しているといえるかもしれない。そして、ロマンスの主人公としては魅力に乏しいGuyonが読者の理想像として引用されていることと、17世紀の英国で豊饒なロマンスが書かれなくなったこととは、どこかでつながっているのかもしれない。

注

- 1) 本稿では以後*FQ*と略記する。
- 2) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. A. C. Hamilton (London, 1977) Book II, Canto x, Stanza 68. 訳中の固有名詞についてはu/vの表記に関してのみ現代スベリングにしてある。
- 3) Cf. *FQ*, I. ix. 5においてArthurは次のように述べている:

Him [Merlin] oft and oft I askt in priuitie,
Of what loines and what lignage I did spring:
Whose aunswere bad me still assured bee,
That I was sonne and heire vnto a king,
As time in her iust terme the truth to light should bring.

- 4) Cf. Virgil, *Eclogae*, IV. また、Andrew Marvellは*FQ*のこの箇所を想起して‘The Garden’ (c. 1650), 11. 34-38. を書いたのかもしれない:

Ripe Apples drop about my head;

The Luscious Clusters of the Vine
 Upon my Mouth do crush their Wine;
 The Nectaren, and curious Peach,
 Into my hands themselves do reach;

The Poems and Letters of Andrew Marvell, ed., H. M. Margoliouth, 2nd ed. (Oxford, 1951), I, 49.

- 5) Edmund Spenser, 'A letter of the Authors expounding his whole intention in the course of this worke... To the Right noble, and Valorous, Sir Walter Raleigh knight, Lo.' (1590).
- 6) Horace, *Epistle*, II, 3, 'Ars Poetica', 11. 333-34, 343-44. *Horace: Satires, Epistles and Ars Poetica*, ed. H. Rushton Fairclough (Cambridge, Mass., 1929), 478.
- 7) Philip Sidney, *Defence of Poesie* (1595), ed. Albert Feuillerat (Cambridge, 1962), 18.
- 8) *Ibid.* 19.
- 9) Plato, *The Republic*, Book X.
- 10) John Milton, *Areopagitica: A Speech of Mr. John Milton For the Liberty of Vnlicenc'd Printing, To the Parliament of England* (London, 1644), ed. Ernest Sirluck, *Complete Prose Works of John Milton*, Vol. II (New Haven, 1959), 514-17.
- 11) *The Faerie Queene* 第2巻で Guyon は、巡礼とともにではなく、単独で Mammon の洞窟を訪れるが、Milton は巡礼が同行したように書いている。この誤読については、上記 *Areopagitica* の edition につけられた Sirluck の注釈、および、E. Sirluck, "Milton Revises *The Faerie Queene*," *Modern Philology*, XLVIII (1950), 90-96, Harold Bloom, "Milton and his precursors," *A Map of Misreading* (New York, 1975), 125-43 などでも詳しく論じられているのでここでは立ち入らない。
- 12) 引用中の、'a better teacher than Scotus or Aquinas' という一句はしばしば誤解されるように Milton が Spenser を文学上の「師」と仰いでいる、という表明ではない。Milton の言葉づかいは、Girolamo Fracastoro (1483-1553) の 'Virgil was a better teacher than Cato or Varro because he wrote poetry' (*Naugerius sive De Poetica dialogus*, 1555, tr. S. P. Bovie in *Encyclopedia of Poetry and Poetics*, Princeton, 1965) という主張や、Erasmus da Valvasone (1523-1593) の 'the uneducated might learn more about theology from

pious poets than from Scotus or Aquinas' (Tr. PAF in *A Milton Encyclopedia*, Lewisburg, 1978-80) という主張に奇妙に似ている。Fracastoro や Valvasone の主張は、読み手を教導する効果において文学作品は哲学、神学よりも優れている、という一般論の提喩と考えられるが、Milton はそれにならいつつ、道徳的な詩の書き手としての Spenser を賞賛しているのである。